

椎名麟三『懲役人の告発』論

－「死んだように生きる」ことをめぐって－

金慶湖*
kkhbtty@hotmail.com

＜目次＞

- | | |
|------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 3. 「死んだように生きる」ことをめぐって |
| 2. 「おれ」の変貌 | 4. むすびに |

主題語: 椎名麟三(Rinzo Shiina), 懲役人の告発(*Denunciation of a prisoner*), キルケゴール(Søren Kierkegaard), 死に至る病(*The Sickness unto death*), イエス・キリスト(Jesus Christ), 復活(Resurrection)

1. はじめに

『懲役人の告発』は、昭和四十四年八月、「純文学書き下ろし特別作品」として新潮社から刊行された。四年後の作者の死により、最後の長編小説となった。

この小説の主人公、「おれ」(田原長作、二十四歳)は、十二歳の少女を小型トラックで撥ね殺してしまっ以来、「もうとっくに死んでしまっている」ように生きており、頻りに現れる「首のない黒い犬」の幻覚に魘されている。彼の父(長太郎)と叔父(長次)は、それぞれ人生を極端に否定、また肯定する人物たちで、対称する二つの極点を成している。その間には、父の後妻の連れ子で、今は叔父の養女となっている、無垢奔放な美しい少女(福子、十二歳)がおり、ほかの人物たちの、得られない「自由」の象徴のようにになっている。この、少女の自由な振る舞いを通して、傍らで「自由」に似た感情を享受するということは、所詮幻影に過ぎないもので、結局、父は少女を犯して自殺し、叔父は彼女を空気銃で射殺する。そして、その実母さえ現れない、和尚と白痴の少年と「おれ」の三人だけの荒涼たる葬列の場面でこの小説は終わる。

一人は十二歳の少女を犯し、もう一人は射殺するという猟奇的な展開と、怪奇な幻視、そしてこの世の終末を思わせるような奇異な風景描写としてのエンディングを持つこの作

* 韓南大学 日語日文学科 講師

品は、文字通りに不気味さに満ちている。ところが、初版本の箱の書評には、「この恐ろしい実在感をもって迫るところのものそのものよりほかは一切を拒み、しかも全体が魂の劇にほかならぬ小説を読みおえて、いいようのない心のやすらぎ」(大江健三郎、傍点原著者)を与えられたと書かれている。小説のなかに繰り広げられる事件たちの質料からは、どう考えても「心のやすらぎ」なるものは、どこから起因するのであろうか。

執筆にあたって、作者は「現在物質が支配している、人間性を奪ってしまっているということが、まずぼくのなかにあった」と言っている。この、現代社会において人間性を奪ってしまっているという「物質」、つまり「もの」に対する作者の冷徹な眼差しは、そのまま文体となってこの作を成している。

おれは、味噌汁の椀に口を吸い寄せられ、箸先を焼いたアジの干物に翻弄され、どんぶりはおれの顔をその上へもって来させるのだ。これが人間なのだという気がふとした。(略)たしかにここで食うことは、食うために食うという肉体の仕事であっておれの精神の知らなくてもいいことなのだ。(略)身体をやつのおれの心に対するよそよそしさを感じずにはいられないのだ。何の心配もせずに食べていやがるし、死という最後の決定権もそいつがにぎっていやがるのだ。²⁾

ここでは、味噌汁の椀が、アジの干し物が、どんぶりが「おれ」を支配し、口を寄せ、翻弄し、顔をもって来させる。そして、この逆転した力学関係により、自らの「肉体」さえもなお、「よそよそしさ」を帯びた「もの」とされ、そこから「精神」は分離され、疎外していく。「物質が支配している、人間性を奪ってしまっている」「現在」に対する作者の「精神」は、いわば「特別人称」(野間宏)、あるいは「モノ称」(高堂要)と名付けられた、この、ものが主格となっている独特な文体により支えられているのである。

従って、先行論としても、文体から作者の意図を読みとろうとする試みが多く、そのなかでも、岡庭昇³⁾は、「外部世界の方が<私>をながめ、彩り、規定している」と把握し、この「文体が反映する『眺められた私』の位相こそ、まさにこの作品世界の基本的な要因に他ならない」とする。こうした「圧倒的な<もの>の優位の世界」によって、「<私>を見すえる荒野」が創出され、そこから、この小説の主張は、「肉体」と「世界」、<私>と全体との激情の内

1) 対談野間宏・椎名麟三(1969.7)「機械文明と人間」雑誌「波」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』21、冬樹社、p.578)

2) 椎名麟三(1969)『懲役人の告発』新潮社(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』21、pp.61-62)

3) 岡庭昇(1972)『椎名麟三論』冬樹社、pp.248-249、p.264

なる統一」へ向かうとする。また、高堂要⁴⁾は、「この文体の創造は、作者の主体の変革なくしては起こり得なかった」とし、その「主体の変革」とは、「懲役人」であり、「完全な死体」としてのそれであるが故に、この小説は、そうした存在の噴き上げる「陰府」からの「呻き声」だとする。つまり、ものと人間の立場と関係が逆転している、「荒野」または「陰府」を描出することによって、「もの」が「人間性を奪ってしまっている」「現在」の社会を「告発」し、その一度は奪われ喪失した「人間性」、即ち、疎外された「精神」の復権を、作者はこの作品で計らっている、と言うことが出来る。そうしたパラドックスのなかに自らの主張を吹き込もうとした際、作者にとって、この文体はまさに有効だったと言えよう。

ところで、この独特な文体には、ものが主格になっている「モノ称」のみならず、物語りを運ぶ語り手として、「おれ」称も混在しており、それを通して、主人公の「おれ」の内面で起きている、ある変貌を垣間見ることが出来る。しかも、その変貌こそ、この作品のテーマそのもののように思われるのである。だがしかし、先行論ではその変貌に対して十分に注意が払われておらず、気づいていないばかりでなく、誤解されていることさえある。また、その変貌をめぐる諸条件、即ち、主人公に付きまとう「首のない黒い犬」の幻覚や、福子の身に起こった悲劇諸々に関して、そこに秘められている多くの謎もなお未だ十分に説かれていない。本稿では、それらの謎を読み解き、主人公の変貌の相を明確にすることにより、この作品での作者の真の主張に迫りたいと考える。

2. 「おれ」の変貌

小説の冒頭は、「おれは、パリパリとした真新しい札が好きだ。」で始まっている。「百円札の真新しさのなかに、(略)夢でも希望でもない、それ以上の身のしまるように生き生きさせてくれる清新な何か」が感じられるとする。この「清新な何か」の正体は何かということがこの小説で投げ出される最初の謎であるが、こうした「生き生き」とした軽快なテンポの中、そこにすぐ「おれはやっと二十四になったばかりだが、もうとっくに死んでしまっているような気がしている」と来て、「おれ」の陰鬱な内面世界が露呈される。そこでこの「おれ」の世界には暗雲が立ちこめていくばかりかと思うと、またそこに冷やかではあるが、軽快なテンポが続き、椎名流のブラックユーモアが醸し出されるのである。このテンポが、「お

4) 高堂要(1989)『椎名麟三論 その作品にみる』新教出版社、p.223

れ称」と「モノ称」の入り混じったこの作品の文体の独特さを物語っているように思われる。

この「おれ」が「もうとっくに死んでしまっている」ようになったのは、昨年、「いい気になり過ぎて」、飲酒運転で十二歳の少女を車で撥ね殺してしまったからである。その時、「おれ」にとって「死」は、「少女の前頭部へずぶりとおれの指がめり込み、彼女の脳みそがおれの指をつかんだときの生あたたかいやな感触」として、「おれ」の中に深く刻まれ、「そのときおれも死んだ」と言う。そして「おれ」の前に「首のない黒い犬」が表れるのである。務めている工場からの帰り道の墓場で、「恐怖」で「身体をこわばらせ」る「おれ」に「首のない黒い犬」は「気持ちがよいようにキリキリ舞いを」する。「おれは、おれ自身の虚無を見たのかも知れないという気がした」のである。「首のない黒い犬」は、勿論幻覚に過ぎないが、「おれ」の奥底に深く根ざしている「虚無」の表れであり、「存在全体を暗い空虚なもの」にしかねない凶暴な破壊力をもっている。この、「首のない黒い犬」で象徴された「虚無」というのは如何なるものであろうか。

それは、単に主人公を無気力に陥らせ、無意味に生活を営ませるという、結果としてのそれより、どこから来たものなのかという原因のほうに、それへの極服の可能性があるように思われる。この「虚無」の象徴には「首がない」。それは端的な造形としての「死」である。この一切を「虚無」にするものの根源には、「死」があるのであり、最初は少女の「死体」の持つ「触感」であったが、今やその「死」は「おれ」の状況如何を問わず、どこにでも現れうる、肉体を持たない幻覚と化し、その暴威を振るうのである。肉体を持たないでも形はあり、これは脳裏の片隅に潜んでいる人間の原始的な「死」への恐怖の實在に裏打ちされるのであろう。誰もが拒むことの出来ない、突然襲ってくる「死」への実感、ここに、鮮やかで厳然たる「死」の自己主張がある。

だが、「おれ」は、死んだと同然のように、その日、その日を辛うじて凌ぎ、「虚無」の最中をさ迷っているとはいえ、その「虚無」に飲み込まれ、生を否定したり、あるいは日常に埋没し、自分から疎外されていくばかりのことは断固として拒否する。「おれ」は精一杯ほかの生き方を模索するのである。「おれのなかに首のない黒い犬が住んでいようと、おれは生き生きと生きたいのだ。こんな懲役人のような暮しから逃げ出したいのだ」⁵⁾とする。「このおれを生き生き生かしてくれるもの、このおれにとって失うことのできないもの、それを見つけないければ駄目なのだ」⁶⁾とし、「おれの見出さなければならぬものは、おれのしっかり立てる根拠であるはずなのだ」⁷⁾とする。「生き生きと生き」るために、「おれ」は必

5) 前掲注2、p.74

6) 前掲注2、p.82

死に思案し続けるのである。そして、新たな生き方を見つけることが出来た。

『死んだように生きる生き方もあるかも知れない。』とおれは工場の物どもを見わたしながら考えた。⁸⁾

ほとんど読者に気づかれまいと隠しているかのような、ほんの微細な覚醒ではあるが、ここで主人公は思考の昇華を一つ果たしたのである。「死んでしまっているような気がしている」生き様から、「死んだように生きる」というのが一つの「生き方」とあるところまで思考を突き進めたのである。

しかし、「死んだように生きる生き方」というのが、果たして「おれを生き生き生かしてくれる」のであろうか。ただの駄洒落に過ぎないような、この「死んだように生きる生き方」とは、一体如何なることであらうか。これは、あきらかにキルケゴールからの影響である。

絶望は、この書物全体を通じて、病として理解されていて、薬として理解されてはいないということ、わたしはここで、きっぱりと注意しておきたい。すなわち、絶望はそれほど弁証法的なのである。同じようにまた、キリスト教の用語でも、死は、最大の精神的悲慘を表すことばであるが、しかも救済は、まさに死ぬことに、死んだもののように生きることにあるのである。⁹⁾

ここに「絶望はそれほど弁証法的である」とあるが、『死に至る病』(一八四九)において、キルケゴールの説く「絶望」、即ち人間の持つ「弱さ」がために「神」を受け入れ得ずにいるという「罪」の諸様相を「病」として見つめることは、それだけにそこを抜け出て、また「薬」としての働きをもさらに越えて、それ以上の何物かになりうるという意味であろう。つまり、「絶望」の中にごめく「弁証法的」な力は、「死」という「最大の精神的な悲慘」を経、「救済」に跳躍するのである。「死んだもののように生きること」に「キリスト教」の「救済」があるというキルケゴールの「弁証法的」な思考はそのまま、椎名のキリスト教理解の根幹を成すものと言える。というのは、椎名の説くイエス・キリストの「復活」のビジョンというのが正に「弁証法的」なものであるからである。

7) 前掲注2、p.87

8) 前掲注2、p.88

9) キルケゴール著、榊田啓三郎訳(1978)『死に至る病』『世界の名著40キルケゴール』中央公論社、pp.430-431

同時に死んでいて生きているイエスの二重性は、私が絶対と考えていたこの世のあらゆる必然性を一瞬のうちに、打ちくだしてしまったのである。

なぜならそのイエスは(略)私たちの考える二つの絶対、生の絶対性と死の(略)絶対性(略)を超えて存在しておられるのである。私たちの絶対的な必然性と考えている壁がここではくずれ落ちている。しかしそれこそ「ほんとうの自由」というものではないか。10)

椎名にとっては、「同時に死んでいて生きている」というイエス・キリストの「復活」により、「あらゆる必然性」は「一瞬のうちに、打ちくだ」かれてしまった。「死」と「生」といった、決して相容れない矛盾する二項の「絶対性」をイエスは「越えて存在して」見せたのである。つまり、一度は「死」んだが、今や蘇ってまたもや「生」のところに戻って来ているというわけではない。「死」であると同時に「生」であり、その二つを「越えて存在」するのである。椎名のこのような「弁証法的」な「復活」のビジョン、「死」と「生」とを「越えて存在」するというキリスト理解によって、「死」からもたらされた「絶対的な」虚無は「くずれ落ち」、そこに「救済」、即ち「ほんとうの自由」が表れるのである。このキリストの「復活」の啓示こそ、今から主人公の掴みとるであろう「死んだように生きる生き方」の「根拠」、「おれの見出さなければならない」「おれのしっかり立てる根拠」なのである。

3. 「死んだように生きる」ことをめぐって

しかし、弁証法云々以前に、この、「死んだように生きる」という言葉の持っている紛らわしさについて触れておかねばならない。つまり、その言葉自体、紛れもなく否定的な響きをもっており、望ましい生き方だとはとうてい言い難い。佐々木啓一は、「死んだように生きることは、絶対的な虚無につながる」11)と書いており、何の疑いもなく、言葉の否定的な響きをそのまま受け入れているのである。言い換えれば、主人公の内部にあった覚醒、「死んだように生きる生き方」への同意と、覚醒する前の「死んでしまっているような気がしている」生き様への拒否とがこんがらかっていて、前者のところに主人公が移っていることに全く気づいていないと言わざるを得ない。作品の、例の文章に続く記述は次のように

10) 椎名麟三(1966.4)「復活と私」雑誌「信徒の友」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』20、冬樹社、p.260)

11) 佐々木啓一(1974)『椎名麟三研究』冬樹社、p.281

なっている。

『死んだように生きる生き方もあるかも知れない。』とおれは工場の物どもを見わたしながら考えた。

しかしおれはすぐがっかりしていた。死んだように生きるためには、やはりはっきりしたそのように生きて行ける根拠をもっていなければならないからだ。全く懲役人のような暮らしは死んだような生き方であるはずはない。¹²⁾

引用の最後に「全く懲役人のような暮らしは死んだような生き方であるはずはない」とある。それで「ない」と言っているのだ。「死んだような生き方」は「懲役人のような暮らし」ではないのである。「懲役人」が得られないものなのだ。それは、佐々木の説くように「絶対的な虚無につながる」ってしまう「懲役人」の生き方ではなくて、「懲役人」でないもの、つまり自由人としての生き方なのである。キルケゴールから借りて作者の主張している、この「死んだような生き方」とは、決して仕方がないので生きているといった、「死んでしまったような気がしている」生き様のような、「虚無」の中に沈潜し、ほぼ溺れかけている「絶望」的な状態を指すものではない。「死んだように生きることは、絶対的な虚無につながる」のではなく、それどころか、その「虚無」の極限を跳躍し、そこを凜と抜け出た、次元を異にする「弁証法的」に新たな境地、つまり「救済」のところに立つことを意味するのである。

そして、主人公は、さらに一段と内面の変貌を遂げるのである。

たしかにおれは、人生を肯定したり、否定したりできる場所にはいないことは知りすぎているつもりだった。死んだような仕方で生きようとしている人間にとって、そんな場所なんかない筈だからだ。ただそのとき、それがおれの現実ならば、その現実を、積極的に喜べるように生きたいと思っただけなのだ。そこにおれの人生からの出口があるのかも知れないと思ったのである。¹³⁾

「死んだように生きる生き方」への主人公の微細な覚醒は、それを「積極的に喜べるように生きたい」とまで来た。だがしかし、「おれの人生からの出口」を、即ち「死んだように生きる生き方」の獲得を、完全なるものにするためには一つの課題が残っている。主人公を「がっかり」させた、未だ見出せていない「根拠」を得ることである。

12) 前掲注8

13) 前掲注2、p.128

上で見て来たように、キルケゴールは、「キリスト教の用語で(略)、救済は、まさに(略)死んだもののよう生きることにある」とした。つまり、「死んだもののよう生きること」とは、キリスト教における「救済」であり、その「根拠」とは、取りも直さず「復活」のことである。その宗教的な啓示を得るためには、先ずはイエス・キリストにたどり着かなければならないのである。またそのためには、キリストより先に、何より「神」への感応がなされなければならない。神と人間との仲介者であるイエス・キリストなしに神とつながることは出来ない、と言う前に、そもそも「神」との感応なしにキリストといった宗教的な存在が受け入れられるはずがない。キリスト教の教義の説く形而上的な存在を受け入れるためには、一先ず宗教以前の、われわれの形而下的な存在に閃いて来る神への予感、神に対する原初的な慄きが必要とされる。

そこで、福子が殺された後の場面をみよう。

おれは福子の部屋へ入った。苦しまなかったせいか、きれいな寝顔だった。手首を握った。しかしどう探しても脈らしいものは指に感じられなかった。おれは彼女の頬をたたいた。それは次第に乱暴なほどつよくなっていた。おれの眼から水が流れていたせいなのだ。おれは、何かに追われるように便所へ立った。便所の窓の外には闇がひろがっていた。しかしいくら立っても小便は出て来なかった。ただ、そのかわりに、神様という言葉が出るばかりなのだ。しかしおれはそれでも出ない小便をしつづけていた。¹⁴⁾

この、あまりにも切実な呼びかけをもって、主人公は一種の靈的なパトスにかられ、自らを神へ向かわしめ、その感応を遂げた。キルケゴールは、「祈」ることに触れ、「自己の本質が震撼せしめられた人のみが、神との関係にはいったといえるのである」¹⁵⁾と書いたが、ここの「震撼」をもった「神との関係」という箇所から椎名が着想を得たか否かは定かではないが、たしかに似た高揚がそこにはある。

ところで、敬虔な信徒の発想だとは言い難い、ここの「便所」へ立って「神様」を口にするという場面を如何に捉えるべきであろうか。椎名は、昭和二十五年にキリスト教の洗礼を受けたのだが、次にその日の感想が記されている。自分自身を「彼」と呼び、遠くから眺めている調子で書いている。

14) 前掲注2、p.206

15) 前掲注9、p.470

むろん笑いものになる覚悟で、彼はその二、三ヶ月前のクリスマスの日、上原教会の赤岩栄牧師から洗礼を受けたのだが、牧師の手から、何のことはない頭に二、三滴の水が落ちただけにすぎなかったのである。何ごとも起こらなかった。(略)だが、洗礼を受けた後で、教会のひとびとが口々にその彼におめでとうをいった。彼はますます変な気持ちになって来た。何かが妙な工合だった。で、彼は、その集会が終ると、急いで便所へ行って長々と小便をした。どうにもバカらしくてやりきれなかったからである。その便所の窓からは、アッケラカンとした寒そうな青い空が見え、片方の紐のとれた衛生マスクの形をした白い雲がうかんでいた。¹⁶⁾

椎名の脳裏に、「神」と「便所」とが結びついてしまったのは、まさにこうした彼自身の実体験からなのかも知れない。「懲役人の告発」の二年前の短編「失踪宣告」にも、

私は、洗面道具をもって裏の井戸へ行った。東の空は明るくなりはじめていた。紫色の雲が次第に赤味をおびて行った。私は、田の畦へ上って小用を足した。ふと神を思った。¹⁷⁾

との箇所があり、「神」を思う場面では、頻繁に「小用」や「便所」が出てくる。しかし、慎みがないだとか、椎名特有のブラックユーモアなどという一次的な印象のあとに、考えさせられるのは、人間、いな、動物が排泄することは、ごく自然なことであり、生物なら何物でもなすしかほかはない、「生」の証拠そのものであるということである。それをしないというのは、「生」が終ったこと、「死」を意味する。「生」のために必須である代謝の一連の動作の末端にあり、それゆえ、形而上的な存在との対極を示す、最も形而下的な存在としての自覚が、「便所」に立ち入るこの瞬間に持たれる。つまり、椎名は「神」を思い起こす時に、最小限まで自らをすくめ、最大限に「神」を崇めることができるのである。ならば、これに関するキルケゴールの記事はないのであろうか。

精神の世界というものは、音響学的に見ると、このように奇妙な構造をしており、その距離関係はこのように奇妙にできているのである。(略)神の最も近くに迫ることができるのは、神から最も遠く離れている場合である。神の近くに迫るためには、遠く神から離れ去ってゆかなければならない。神の近くにいれば、神に迫ることはできない。近くににいるということは、「とりもなおさず」遠く離れていることなのである。¹⁸⁾

16) 椎名麟三(1956.8)「神のユーモア」「婦人公論」(ただし引用は、椎名麟三(1974)『全集』15、冬樹社、p.402)

17) 椎名麟三(1967.9)「失踪宣告」「展望」(ただし引用は、椎名麟三(1974)『全集』10、冬樹社、p.452)

18) 前掲注9、p.562

椎名は、「死んだもののよう生きる」というキルケゴールの「救済」の生き方に主人公をたどり着かせ、その後、「震撼」をもった「神との関係」に入らせたのち、最終的に「神」との「距離」における「奇妙な構造」を表現するために、敢えて「神」と「便所」という、一見不謹慎極まりない「精神の世界」を創出したのではないだろうか。

4. むすびに

本稿では、椎名麟三『懲役人の告発』を論じた。先行論では十分に論じられていなかった、主人公の内面における変貌の相と、作品のテーマにおけるキルケゴールからの影響を検討し、それにより、作者の真の主張を読みとろうとした。作者は、深い「絶望」から出発するプレ・クリスチャンとでも言うべき青年を通して、彼の「生」に対する姿勢が徐々に変わっていく過程を描き、「死」から持たされる「虚無」を超克するプロセス、つまり「死んだように生きる生き方」、「復活」としての「救済」というキリスト教の福音を伝えているのである。

さて、この作品を説く有効な方法としては、主人公の変貌からのみならず、小説のなかで起きている不穏な事件からのアプローチということも考えられる。この小説で、十二歳の少女を犯し、殺すという、人間としてあるまじき惨いことが描かれたのは、ドストエフスキー「悪霊」(「ロシア報知」、一八七一年～一八七二年)からの着想であろうと考えられるのだが、この「悪霊」との接点に『懲役人の告発』を読み解くための、もう一つの重要な鍵が秘められているように思われるのである。

「悪霊」のなかには、「女の子を辱めたり、けがしたりしても」、「敵討に脳味噌をたたきつぶしても、それでもやはりいい。また、(略)たたきつぶさなくてもそれもやはりいいことです。(略)もしそれを悟ったら、小さな女の子を辱しめなどしなくなるでしょう」との箇所があり、椎名はそれを読むたびに、「何かしら新鮮な、私のまだ知らない「ほんとうの自由」の光が、私の心のなかにさっと差し込むのを感じる」¹⁹⁾と述べている。ところで『懲役人の告発』の中には、「黒い犬は、その黒さを残しながらも、ときどきべっこう色に自分のなかからの光を透かして見せているのだ。その光が、真新しい百円札に感じるような清新な何かを感じさせてくれるのだ」²⁰⁾との箇所があり、前のエッセーで綴っていた「何かしら新鮮

19) 椎名麟三(1966.6)「悪霊」「月間キリスト」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』20、冬樹社、p.135)

な(略)光」という作者の感想をそのまま思わせるのである。

今後の残された課題として、ドストエフスキーが文学的に提示した「姦淫するなかれ」「殺すなかれ」といったキリスト教のおきてと、そして、何を「しても(略)いい。(略)もしそれを悟ったら、小さな女の子を辱しめなどしなくなるでしょう」という、如何にも「弁証法的」な思考を催す、この禅問答めいたドストエフスキーの思想とが、どのように『懲役人の告発』へ影響しているかについて考えてみたい。

* 付記

本稿は、第35回国際学術大会(2017年5月13日、於한밭大学)においての口頭発表を基に執筆したものである。会場でご意見をくださった方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

【参考文献】

- 岡庭昇(1972)『椎名麟三論』冬樹社、pp.248-249、p.264
 キルケゴール著、榊田啓三郎訳(1978)「死に至る病」『世界の名著40 キルケゴール』中央公論社、pp.430-431、p.470、p.562
 佐々木啓一(1974)『椎名麟三研究』冬樹社、p.281
 椎名麟三(1974)「失踪宣告」『椎名麟三全集』10、冬樹社、p.452
 _____(1974)「神のユーモア」『椎名麟三全集』15、冬樹社、p.402
 _____(1977)「悪霊」『椎名麟三全集』20、冬樹社、p.135、p.137
 _____(1977)「復活と私」『椎名麟三全集』20、冬樹社、p.260
 _____(1977)「懲役人の告発」『椎名麟三全集』21、冬樹社、pp.61-62、p.74、pp.87-88、p.128、p.206
 _____(1977)「対談 野間宏・椎名麟三「機械文明と人間」」『椎名麟三全集』21、冬樹社、p.578
 高堂要(1989)『椎名麟三論 その作品にみる』新教出版社、p.223

논문투고일 : 2017년 12월 20일
 심사개시일 : 2018년 01월 16일
 1차 수정일 : 2018년 02월 09일
 2차 수정일 : 2018년 02월 14일
 게재확정일 : 2018년 02월 19일

 < 要 旨 >

椎名麟三『懲役人の告発』論

-「死んだように生きる」ことをめぐって-

金慶湖

本稿では、椎名麟三『懲役人の告発』を論じた。先行論では十分に論じられていなかった、主人公の内面における変貌の相と、作品のテーマにおけるキルケゴールからの影響を考察し、それにより、作者の真の主張を読みとろうとした。キルケゴールは、「キリスト教」の「救済」は「死んだもののように生きることにある」と説いたのだが、それを主なテーマとして、作者はこの小説を書いたのである。作者は、深い「絶望」から出発するプレ・クリスチャンとでも言うべき青年を通して、彼の「生」に対する姿勢が徐々に変わっていく過程を描き、「死」から持たされる「虚無」を超越するプロセス、つまり「死んだように生きる生き方」、「復活」としての「救済」というキリスト教の福音を伝えているのである。

しかし、主人公がキリスト教で言う「復活」の啓示にたどり着くためには、先ず神との感応を遂げなければならない。そこで作者は、少女を犯して殺すという衝撃的で惨い事件を通して、主人公にして切実に神を呼び掛けさせる。しかも主人公が神を連呼するところは便所であるのだが、これらの展開もなお、キルケゴールの説く、「自己の本質が震撼せしめられた人のみが、神との関係にはいったといえるのである」や、「神の最も近くに迫ることができるのは、神から最も遠く離れている場合である」との箇所からの影響であると考えられる。

 A study of Rinzo Shiina's *Denunciation of a prisoner*

-Regarding to "living like a dead"-

Kim, Kyoung-Ho

In this paper, I discussed Shiina Rinzo's *Denunciation of a prisoner*. This study approaches the real argument of the author, by considering the influence of Soren Kierkegaard on the theme of this work and the inner transformation of the hero, which have not been discussed enough on preceding studies. Kierkegaard argues that "salvation" in "Christianity" is in "living like a dead". That argument inspires Rinzo, finally that became main theme in this work. The author depicts the process of changing the hero's attitude towards "life" through a young man who starts from deep "desperation" and should be called a pre-Christian. So, this work conveys the christian gospel of "salvation" as "resurrection", as "living like a dead", the process of overcoming "emptiness" from "death".

Now, to reach the revelation of "resurrection" for the hero in Christianity, at first, it is essential to sympathize with God. To cry out for God desperately, the author let the hero see the cruel and shocking case that someone rapes and murders a little girl of 12 years old. Indeed, the place where the hero cry out for God is a toilet. These advances of the plot are also the influence of Kierkegaard's arguments, "Only the man who is quaked in his essence can enter into the relationship with God", "The closest they can get to God is when they are farthest from God."